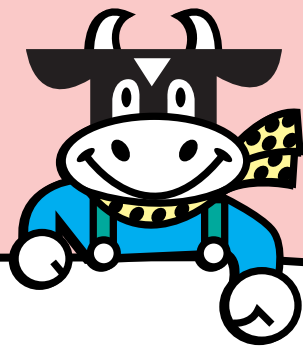




ワンポイント・アドバイス



牛ウイルス性下痢・粘膜炎(BVD MD)とは

牛ウイルス性下痢・粘膜炎(通称BVD MD)。当根管内では一昨年度よりワクチン接種や各自防単位でのバルク乳の検査事業などによってこの病気に對する本格的な対策事業が展開されているので、名前を聞いたことがある人も多くいると思います。しかし馴染みのない方も多いと思われるので、今回はこの病気に對して紹介したいと思います。

はじめに

BVD MDは牛白血病やサルモネラ症などと同じ届出伝染病のひとつです。妊娠牛がこの病原体に感染すると流死産を起こしたり先天性の異常子牛が生まれたりします。さらに生まれた子牛がつねに病原体を保有している、いわゆる持続感染牛(PI牛)となった場合、鼻汁・糞便・尿の中に大量のウイルスを排泄し続け、それにより牛群内や公共牧野が汚染され新たな感染を拡大させます。また持続感染牛は慢性的な下痢症、発育不良

さらには他の病気との複合感染や日和見感染をおこし死亡することも知られており、それらによって生産性に大きな影響をおよぼすことから大きく問題視されています(図1)。



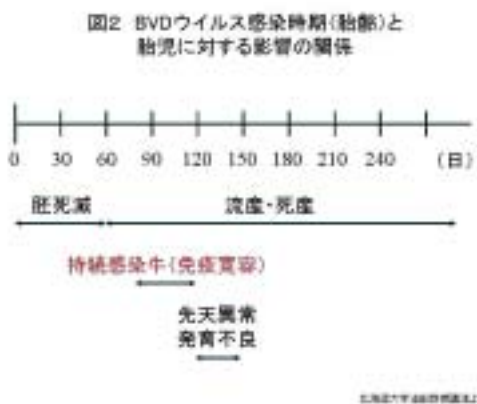
原因

この病気は牛ウイルス性下痢症ウイルス(BVDウイルス)が原因で、さらに遺伝子型により従来の1型と致死率の高い2型に分類されますが、当管内ではいずれも確認されています。

症状

一般に成牛が感染しても一過性の発熱や呼吸器症状、下痢などを示したのちに治癒する場合がほとんどですが、なかには症状を出さない場合(不顕性感染)もあります。しかし免疫のない妊娠牛が感染した場合、胎盤を通じて子牛にも感染が成立します。そしてこの親牛の感染時期によって流死産や奇形、さらには生涯ウイルスを排除しつづける持続感染牛が生まれてきます。

1、胎児の感染時期と症状
胎齢に關係なく流死産の発生が見られますが、感染時期によって以下のような特徴があります(図2)。



胎齢80以下…胚死滅をおこします。
胎齢80~120日…胎児の免疫機構は未発達でウイルスを体から排除することができず自分の一部として認識し(免疫寛容)、持続感染牛となります。
胎齢120~150日…小脳形成不全や盲目、水頭症などの中枢神経異常を伴った先天性異常の子牛が生まれます。
なお、150日齢以降では、ウイルスに對する抗体を保有した健康な子牛が生まれます。

2、粘膜炎
持続感染牛が発症する病気で、発熱、水様性下痢、脱水、全身の粘膜炎の充血やびらん・潰瘍などの症状をおこし、2週間ほどで死亡します。6カ月~2歳での発生が多いことが知られています。

予防・対策

このような伝染性疾患には感受性動物・感染源・感染経路それぞれに對する対策を行うことが基本です。

感受性動物対策：ワクチン接種により牛群内への感染拡大を未然に防ぐことができます。春または秋の一斉ワクチンネーションのプログラムは各自衛防疫組合によって異なりますので、詳細は近くの共済組合までお問い合わせください。なお、ワクチンは一度打てば良いということではなく、十分な免疫力を常に確保するために基礎免疫を受けた後も年に一度は追加免疫を受けるようにして下さい。
感染源対策：持続感染牛を早期摘発し、積極的に淘汰することが重要です。持続感染牛を摘発する方法にはバルク乳の検査や血液からBVDウイルスやウイルスの遺伝子を検出する方法があります。
感染経路対策：妊娠牛を導入する場合

ワクチンを接種していることを確認するか、十分な抗体を持っているか検査することによって、BVDウイルスが農場へ持ち込まれ感染が拡大する事を防止します。

近年予防衛生という概念が少しずつ浸透し、全道的にもこういった疾患の対策が積極的に行われるようになってきました。病気の予防は生産性の低下を防ぐだけではなく、疾病発生時に關わるコストや労務の軽減、さらには個体や生産物の販売時に地域ブランドとしての価値の付与などさまざまなメリットをもたらします。本年度より損害防止事業もこういった伝染性疾患対策に力を入れています。この病気に關することを始め何か分からないことがありましたら近くの共済組合までお問い合わせください。